

安心さがしと社会的スキルおよび パーソナリティ特性との関連

長谷川 孝治 (信州大学人文学部)

Correlation between reassurance seeking, social skills, and personality traits

Koji Hasegawa (Faculty of Arts, Shinshu University)

要 約

安心さがしとは、対人関係の中で自己価値に対する不安を感じたとき、他者が本当に自分のことを大切に思ってくれているかどうかを重要他者に対して繰り返し確認するという傾向のことである。本研究では、安心さがしと社会的スキルおよびパーソナリティ特性との関連について検討を行った。さらに、我々が開発した安心さがし尺度と類似の尺度である、再確認傾向尺度との関連について検討し、尺度の妥当性を検証した。研究1の結果、安心さがしは、社会的スキルのうち、統制スキルとの間に弱い負の相関が見られた。さらに、研究2では、パーソナリティ特性のうち、楽観性と安心さがしとの間に正の相関が見られ、公的および私的自意識とは関連が見られなかった。また、安心さがしと再確認傾向との関連については、再確認願望および再確認行動と正の相関がみられ、併存的妥当性が確認された。安心さがし尺度と再確認傾向尺度との違いについて、下方螺旋過程における調整変数と仲介変数の違いという観点から考察された。

キーワード：自尊心、安心さがし、社会的スキル、楽観性と自意識、再確認傾向

問 題

安心さがし (reassurance seeking) とは、人が自己価値に対して不安を感じたとき、重要他者に対して本当に自分のことを大切に思ってくれているかどうかを過度に確認する傾向のことである。この傾向は、Coyne (1976) の抑うつへの対人理論における中心的な概念である。この理論によると、抑うつ傾向の高い人は、恋人や友人などの重要他者に対して、過度の安心さがしを行い、そのことによって、他者から拒絶されるという下方螺旋過程が存在するとされ、Joinerらによって、このプロセスが実証されてきた (Joiner & Metalsky, 1995; Katz, Beach, & Joiner, 1998)。そして、我々は、この過程が、自尊心の低い人においても同様に見

られることを示してきた（長谷川，2008；長谷川・浦・前田，2009）。具体的には，低自尊心者が安心さがしをすると，友人からの評価が低まり（長谷川・浦，2002），友人から評価されていないと思うようになり（長谷川，2008），さらには抑うつ傾向が高まる（長谷川・浦，2002）ことが示されてきた。

この一連の過程に関する重要な問題として，安心さがしは，この過程の仲介変数（mediator）なのか，あるいは調整変数（moderator）なのかということがあげられる（長谷川，2008）。仲介変数とは，独立変数と従属変数との関連を仲介する変数であり（Baron & Kenny, 1986），この過程でいえば，自尊心の低い人や抑うつ傾向の高い人ほど，過度に安心さがしをし，また，安心さがしをすればするほど，重要他者から拒絶されるという影響過程が存在するとき，安心さがしが仲介変数として機能していることになる。この場合には，安心さがしは，独立変数である自尊心や抑うつ傾向と相関があることになる。Coyne (1976)の理論では，本来，このような安心さがしの仲介過程を想定していると考えられる。これに対して，調整変数とは，独立変数が従属変数に及ぼす過程の強弱を，外部から調整する役割を持つ変数のことであり（Baron & Kenny, 1986），本来的には，独立変数および従属変数との間に関連を持たない変数である。安心さがしが下方螺旋過程の調整変数として機能する場合，例えば，自尊心の低い人や抑うつ傾向の高い人が安心さがしをする場合には，他者から拒絶されるけれども，しない場合には拒絶されないという結果が示されることになる。抑うつへの対人理論を実証したパイオニアである Joiner は，多くの研究において，一貫して安心さがしを調整変数として捉え，そのような機能を持つことを示している（e.g., Joiner & Metalsky, 1995; Joiner, Alfano, & Metalsky, 1992）。このことは，上述したように，本来の Coyne (1976)の理論とは対応しない。このような矛盾に至った理由として，先行研究における抑うつ傾向と安心さがしとの相関はみられるけれども，弱いか，かなり低い場合もあり（Joiner, et al., 1992; Joiner & Metalsky, 1995; Benazon, 2000），安心さがしを下方螺旋過程の仲介変数として捉えるよりも，調整変数として捉える方が，データとして妥当性が高いと判断されたためかもしれない。このように，抑うつ傾向を独立変数とした下方螺旋過程の実証研究では，安心さがしは仲介変数としても，調整変数としても機能する可能性が示唆されている。これに対して，自尊心を独立変数とした我々の研究では，安心さがしはほとんどの場合，調整変数として機能していた（長谷川・浦，2002；長谷川・浦，2003）。すなわち，自尊心の低い人が安心さがしをする場合には，他者から拒絶されるけれども，しない場合には拒絶されないという結果が示されてきた。また，逆に，自尊心の高い人が安心さがしをしてもしなくても，他者から拒絶されないという結果も見いだされてきた。このように，安心さがしを調整変数とする場合には，ひとつのリサーチクエスチョンが残る。それは，低自尊心者の安心さがしは，他者からの拒絶を引き起こすのに，高自尊心者の安心さがしはなぜ他者から受容されるのかという問題である。この問題を検討するためには，低自尊心者と高自尊心者の安心さがしにどのような違いが見られるかを調査する必要がある。本研究では，このような問題意識にたち，安心さがしと類似した側面を持つ社会的スキルとパーソナリティ特性を取り上げ，それらの関連について検討する。このことによって，安心さがしとはどのような特徴を持つ傾向なのかを明らかにするとともに，低自尊心者と高自尊心者の安心さがしの違いを明確にする。

また、本研究のもうひとつの目的は、我々の開発した安心さがし尺度について、先行研究で用いられた尺度との関連を調査し、妥当性の検討を行うことである。勝谷（2004）は、抑うつの方螺旋過程の存在を検証するために、我々と同様に、独自に再確認傾向尺度を開発している。ここで、「再確認傾向」という用語は、上述した Coyne（1978）における“reassurance seeking”の訳語であり、勝谷（2004）では、我々とは異なり、直接的な訳出をしている。これに対して、我々は、“reassurance”の意味の中に、「安心」という言葉があることに着目し、重要他者に対して自分のことを大切に思ってくれているかを繰り返し尋ねるという対人行動の独特のニュアンスがうまく伝わるように、「安心さがし」という訳出をしたのである。

勝谷（2004）の再確認傾向尺度と我々の安心さがし尺度との共通点は、長谷川（2008）で指摘したように、Joiner らの4項目の尺度の問題点を解消した尺度を作成しようとした点である。具体的には、Joiner の尺度のうち、2項目は、他者に安心さがしをすることで、他者からの拒絶されることがあるという拒絶認知を測定するものになっている。これは、下方螺旋過程の従属変数の一部を、仲介変数である安心さがし尺度の中に含み込むものであり、測度として妥当ではないと考えられる。勝谷（2004）でも、同様の考えのもと、そのような項目は含めない尺度を作成している。このような類似点に対して、われわれの尺度との相違点は、勝谷（2004）では、再確認傾向を、再確認行動と再確認願望の2因子に分類しているところである。再確認行動とは、先行研究において用いられてきた Joiner らの尺度に含まれる項目であり、重要他者に繰り返し確認を求める行動とされる。勝谷（2004）によると、この行動は、本来の意味での再確認行動以外に、自己高揚動機や親和動機など、他の動機に基づいて起こることがあるとされ、これだけを測定するのでは、再確認傾向を適切に測定できないとしている。この問題を解消するために含められたのが、再確認願望の項目である。再確認願望とは、重要他者が自分の価値や能力、存在を認めているのか、大事に思っているのか、気にかけているのかなどを確かめる動機づけのことであるとされる。このように、勝谷（2004）の尺度は、再確認傾向の動機づけ的な側面と行動的側面の両方を測定しようとする特徴がある。これに対して、我々の安心さがし尺度は、本来の安心さがし行動の定義に沿った行動的側面のみを測定しようとするものである。勝谷（2004）が指摘するように、再確認行動は、自己高揚動機や親和動機などさまざまな動機に基づいた行動を含む可能性があるけれども、再確認傾向尺度において、新たに追加された再確認願望も、自意識（Fenigstein, Scheier, & Buss, 1975；菅原, 1984）や楽観性（Scheier & Carver, 1985；中村, 2000）など、他のパーソナリティ変数の影響を含んでしまうものであると考える。そこで、我々としては、あえて再確認願望の側面を含めず、本来の Coyne（1976）の理論における安心さがし行動の定義を重視する形で、尺度を作成したのである。このように、両尺度には共通する点と相違点がある。これらが相互にどのように関連するかを検討することは、抑うつおよび低自尊心の下方螺旋過程の様相をより詳細に理解することにつながると考える。そこで、本研究では、安心さがし尺度と再確認傾向との関連を検討することを、第2の目的とする。

研究 1

研究1の目的は、安心さがしと社会的スキルとの関連について検討することである。社会的スキルとは、他者との円滑な人間関係を保持してゆくために必要な認知的判断や行動をさす(堀毛, 2004)。本分析では、社会的スキルの中でも、特に、基本スキル(堀毛, 2004)をとりあげる。基本スキルとは、状況を越えた対人コミュニケーション全般にかかわる能力を示す概念とされ、記号化、解読、統制の3次元からなるものとされる。記号化は、自分の意図や感情を相手に正確に伝えるスキル、解読は、相手の意図や感情を正確に読みとるスキル、統制は、感情をコントロールするスキルである。これらのスキルは、コミュニケーション過程全般に対して、いずれも重要な役割も担うものであり、これらの高さは、コミュニケーション全般に対する印象管理能力の高さとして捉えられうる(堀毛, 2004)。

この基本スキルと安心さがしとの関連について考えると、重要他者への繰り返しの安心さがしは、記号化スキルの低さと関連しているかもしれない。また、特に、低自尊心者のとる安心さがしは、記号化スキルや統制スキルの低さが原因となり、他者からの拒絶を引き起こすかもしれない。これらのリサーチクエスションについて検討することが、研究1の目的である。

方法

調査参加者と調査の概要

大学1年生が多く履修する心理学関連の授業において、2001年12月(第1回調査:以下、Time 1)と2002年2月(第2回調査:以下、Time 2)に、約2ヶ月の期間をあけたパネル調査を行った。両調査時点ともに同内容の質問紙を用いた。授業の終了時に、調査を実施する旨を教示した。その際、「本調査は親しい同性の友人とペアで参加する形式をとる」と調査参加者に伝え、その場で親しい同性の友人とペアになってもらった。その授業に親しい友人がいない場合には、授業を受けていない友人とペアを組んでもよいことを付け加えて教示し、ペアに質問紙のセットを1部配布した。プライバシーを考慮し、回答した質問紙は、それぞれ封筒(小)に入れて密封し、ペアをセットにして、封筒(大)に入れ密封したものを、配布から1週間後に提出させた。両調査に参加し、ペアになった相手が変わらなかった大学1年生55ペア(110名:男性32名、女性78名)を分析対象とした。参加者のTime 1時点の平均年齢は、18.95歳($SD=0.72$)であった。

質問紙の構成(分析に用いた変数)

1) 自尊心

自己全体への評価を測る Rosenberg (1965) の自尊感情尺度の邦訳版(山本・松井・山成, 1982)の10項目を用いた。回答は、各項目内容に対して、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で評定させた。分析には、項目の合計得点を項目数で除した平均得点を用いた。この得点が高いほど、全体的な自己評価である自尊心が高いことを意味する。

2) 安心さがし

長谷川 (2008) で作成された安心さがし尺度を用いた (9項目, 5件法)。Time 1, Time 2ともに, 各項目の前の教示文で, 今回の調査のパートナーである友人を思い浮かべてもらった。そして, その人から「あなたが自分自身について抱いているイメージ」と異なる評価を受けたとすると, どのような行動や反応をしようかを問う形式を用いた。具体的な項目は, 「自分のことを心から気づかってくれているかどうか, 相手に確かめる」, 「相手が自分のことを本当に理解していないと思い, 相手の気持ちを聞く」等であった。

項目分析の結果, 「相手の真意を第三者に聞くことで, 確かめようとする」という1項目を削除し, 8項目の合計を項目数で除した得点を, 安心さがし得点として用いた。得点が高いほど, 安心さがしをしようとする傾向が強いことを表す。

3) 再確認傾向

勝谷 (2004) によって開発された再確認傾向尺度 (12項目) を, 今回の調査のパートナーに対する認知や行動を尋ねる形に修正したものを用いた。Time 1 の尺度について, 因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行ったところ, 想定していた再確認願望因子 (6項目) と再確認行動因子 (6項目) が抽出された。同様に Time 2 の尺度を因子分析したところ, いくつかの項目について, 想定していない因子への負荷量が高くなった。また, 勝谷 (2004) と同様の2因子モデルで, 確認的因子分析を行ったところ, Time 1 の尺度の適合性指標は, $GFI=.855$, $AGFI=.786$, $CFI=.862$, $RMSEA=.103$, $\chi^2(53)=114.06$, $p<.001$ となり, それほど高い適合性は得られなかった。同様に, Time 2 の尺度は, $GFI=.845$, $AGFI=.772$, $CFI=.880$, $RMSEA=.107$, $\chi^2(53)=119.30$, $p<.001$ となり, こちらの適合性もあまり高くなかった。しかしながら, α 係数 (Table 1) の値を見ると, Time 2 の各因子とも, Time 1 の両因子と同程度の高さの信頼性を示したことから, Time 1 で示された, 当初想定していた因子を採用した。分析には, 各因子を構成する項目の合計得点を項目数で除した平均得点を用いた。各得点が高いほど, 再確認傾向が高いことを示す。

4) 基本スキル

堀毛 (2004) の基本スキル尺度 (15項目, 5件法) を用いた。項目内容は, 記号化, 解読, 統制という3つの基本スキルを測定するものであり, 因子分析 (主因子法・プロマックス回転) の結果, 想定した3因子が抽出された。分析には, 各因子を構成する項目の合計得点を項目数で除した平均得点を用いた。

基本スキル尺度は, Time 2 のみで測定され, それ以外の尺度は, いずれも Time 1 と Time 2 の両時点で測定された。

結果と考察

Table 1 に, 本分析で用いた尺度間の相関係数と記述統計量を示した。尺度の信頼性については, いずれも概ね高い信頼性を示した。また, Time 1 と Time 2 の安心さがし尺度の相関をみると, 強い相関があり, 再検査信頼性が高いことが示唆される。

尺度間の関連についてみると, Time 1 の安心さがしと自尊心, また, Time 2 の安心さがしと自尊心の間の相関は, ほぼ無相関であった。これは, 先行研究 (長谷川・浦, 2001; 長

Table 1 自尊心, 安心さがし, 再確認傾向, 基本スキルの記述統計量と相互関係 (研究1)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1. 自尊心(T1)	.85										
2. 安心さがし(T1)	.05	.81									
3. 再確認願望(T1)	-.28 **	.28 **	.82								
4. 再確認行動(T1)	-.45 **	.38 **	.60 **	.72							
5. 自尊心(T2)	.85 **	-.02	-.26 **	-.45 **	.86						
6. 安心さがし(T2)	.06	.61 **	.23 *	.25 **	.01	.88					
7. 再確認願望(T2)	-.26 **	.21 *	.57 **	.46 **	-.26 **	.35 **	.84				
8. 再確認行動(T2)	-.33 **	.38 **	.43 **	.64 **	-.42 **	.42 **	.65 **	.71			
9. 記号化スキル(T2)	.39 **	.01	-.16 †	-.19 †	.51 **	.15	-.26 **	-.22 *	.75		
10. 解説スキル(T2)	.26 **	.03	-.12	-.04	.34 **	.08	-.18	-.08	.46 **	.80	
11. 統制スキル(T2)	-.04	-.15	-.08	-.09	.11	-.19 *	-.12	-.21 *	-.11	.13	.61
<i>M</i>	2.85	2.26	4.18	3.19	2.84	2.29	4.14	3.29	3.25	3.25	3.22
<i>SD</i>	0.69	0.69	1.23	1.09	0.69	0.76	1.20	1.09	0.80	0.69	0.63
<i>N</i>	107	110	107	109	108	110	109	107	110	110	109

Note. 対角行列の値は, α 係数. T1=Time 1, T2=Time 2.

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

谷川・浦, 2002) の結果と一致する。また, Time 2 の安心さがしと基本スキルとの関連についてみると, 統制スキルとは弱いものの負の関連があり, その他のスキルとの関連は見られなかった。このことは, 過度の安心さがしを行う人ほど, 自分の感情をコントロールすることが難しいと思っていることを示唆する。

次に, 安心さがしと再確認傾向との関連についてみると, Time 1, Time 2 ともに, 安心さがしと再確認願望の間には弱い相関が, 再確認行動と間には中程度の相関が示された。これらから, 安心さがしと再確認傾向は, 概念通り, 互いに類似した傾向を測定していることが示唆され, 安心さがし尺度の併存的妥当性が示されたといえる。また, 再確認傾向と基本スキルとの関連をみると, Time 1 の記号化スキルと再確認願望・行動の間に有意傾向ながらも弱い負の相関がみられた。また, Time 2 の記号化スキルについても, 同様の有意な負の相関が示された。さらに, Time 2 の統制スキルは, 再確認行動と弱い負の相関が示された。これらの結果から, 再確認傾向が, 願望・行動ともに高い人ほど, 自分の意図や感情を相手に正確に伝えるという記号化スキルが低いと認知していることを示唆する。また, 再確認行動をとる人ほど, 自分の感情をコントロールすることが難しいと思っていることを示唆する。

また, 低自尊心者と高自尊心者の安心さがし行動の違いを検討するために, Time 1 の自尊心(高・低)×安心さがし(高・低)が社会的スキルに及ぼす影響について, 2 要因の分散分析を行った。独立変数の群分けは, 中央値折半によって行った。記号化スキルを従属変数とした分析の結果, 自尊心の主効果が有意であり ($F(1, 103) = 13.59, p < .01$), 低自尊心者 ($M=3.01, SD=0.79$) よりも, 高自尊心者 ($M=3.54, SD=0.72$) の方が, 記号化スキルが高かった。さらに, 交互作用が有意傾向であり ($F(1, 103) = 2.94, p < .10$), 下位検定を行ったところ, 安心さがしを行わない群において, 低自尊心者 ($M=2.86, SD=0.79$) の方が, 高自尊心者 ($M=3.65, SD=0.77$) よりも記号化スキルが低かった。安心さがしを行う群における, 低自尊心者 ($M=3.17, SD=0.78$) と高自尊心者 ($M=3.46, SD=0.67$) との差は, 有意ではなかった。これらの結果から, 安心さがしを行わない低自尊心者が, 特に記号化スキルが低いこと

が示唆された。

また、解読スキルを従属変数とした分析を行ったところ、ここでも自尊心の主効果が有意であり ($F(1, 103) = 4.30, p < .05$)、低自尊心者 ($M=3.14, SD=0.74$) よりも、高自尊心者 ($M=3.40, SD=0.60$) の方が、解読スキルが高かった。さらに、交互作用が有意傾向であり ($F(1, 103) = 2.94, p < .10$)、下位検定を行ったところ、安心さがしを行わない群において、低自尊心者 ($M=3.03, SD=0.79$) の方が、高自尊心者 ($M=3.53, SD=0.50$) よりも解読スキルが低かった。安心さがしを行う群における、低自尊心者 ($M=3.14, SD=0.74$) と高自尊心者 ($M=3.40, SD=0.60$) との差は、有意ではなかった。これらの結果から、安心さがしを行わない低自尊心者が、特に解読スキルが低いことが示唆された。

統制スキルを従属変数とした分析においては、主効果および交互作用ともに有意ではなかった ($F(1, 103) = 0.05 \sim 0.13, n.s.$)。単相関レベルでは、安心さがしと統制スキルには、弱い負の相関が見られたが、分散分析では、安心さがしの主効果は見られなかった。今後、データ数を増やし、より詳細な検討をする必要がある。

さらに、Time 2 の自尊心と安心さがしを用いて、同様の 2 要因分散分析を行ったところ、記号化スキルおよび解読スキルに対して、上述の Time 1 の結果と同様に、自尊心の主効果が有意であったものの、交互作用は有意ではなかった。また、統制スキルについては、いずれの効果も有意ではなかった。

以上より、単相関レベルでは、安心さがしをする人ほど統制スキルが低く、自尊心との交互作用としては、安心さがししない低自尊心者が、特に記号化や解読スキルが低いことが明らかになった。言い換えれば、安心さがしをしない低自尊心者は、少なくとも自己認知のレベルでは、記号化や解読ができないと思っていることが示唆される。

研究 2

研究 2 では、安心さがしに関連する変数として、まず自意識 (Fenigstein, et al., 1975; 菅原, 1984) を取り上げる。自意識とは、文字通り、自己に注意を向けやすい特性のことであり、自己内部の考えや感情への注意傾向である私的自意識と、自己を社会的対象として意識する傾向である公的自意識の 2 つの要素に分類される。これらの傾向と安心さがしとの関連を考えると、重要他者に自分のことを大切に思ってくれているのかを繰り返し確認する傾向は、自己内部の意識に注意が向きやすい、私的自意識の高い人に顕著なのか、また、他者から見られる自分の側面に注意が向きやすい、公的自意識の高い人に顕著なのかという予測が生じる。あるいは、このような自己への意識と安心さがしとは、まったく関連がないかもしれない。研究 2 では、これらの点について検討することを目的とする。

さらに、ここでは、楽観性 (Scheier & Carver, 1985; 中村, 2000) を検討対象として取り上げる。楽観性とは、将来、肯定的な結果が生じることを期待する傾向と定義されている (中村, 2000)。自らの身の回りに、肯定的な出来事が起こりやすく、否定的な出来事が起こりにくいという認知傾向をもつ人が、楽観性が高いといえる。この傾向と安心さがしとの関連について考えると、楽観性の低い人、つまり悲観主義的な人ほど、自己価値に対する不安を感じやすいために、重要他者に対して安心さがしをするかもしれない。低自尊心者が安心

さがしをしても拒絶され、高自尊心者が安心さがしをしても拒絶されないという先行研究の知見（長谷川，2008；長谷川・浦・前田，2009）について考えると、楽観性の高さが、これらの違いを生じさせる鍵概念であるかもしれない。これらの問題について検討することが研究2の目的である。

方 法

調査参加者と調査の概要

大学への適応過程を検討するために、大学1年生が多く履修する心理学関連の授業において、2002年4月（第1回調査：以下、Time 1）と2002年6月（第2回調査：以下、Time 2）に、約2ヶ月の期間をあけたパネル調査を行った。調査の実施方法については、研究1と同様である。最終的な分析対象は、Time 1とTime 2で調査のパートナーが変わらなかった大学1年生64ペア（128名：男性50名、女性78名）であり、Time 1時点の平均年齢は、18.31歳（ $SD=1.14$ ）であった。

質問紙の構成（分析に用いた変数）

自尊心、安心さがし、再確認傾向については、研究1と同様の尺度を用いた。ただし、再確認傾向尺度については、Time 1およびTime 2ともに、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行ったところ、想定していた2因子が抽出されなかった。また、勝谷（2004）と同様の2因子モデルで、確認的因子分析を行ったところ、Time 1の尺度の適合性指標は、 $GFI=.855$ 、 $AGFI=.787$ 、 $CFI=.867$ 、 $RMSEA=.103$ 、 $\chi^2(53)=124.44$ 、 $p<.001$ となり、それほど高い適合性は得られなかった。同様に、Time 2の尺度は、 $GFI=.877$ 、 $AGFI=.818$ 、 $CFI=.920$ 、 $RMSEA=.094$ 、 $\chi^2(53)=112.84$ 、 $p<.001$ となり、こちらも適合性はそれほど高くなかった。しかしながら、研究1の結果との対応を検討する必要があることや、信頼性係数の値（Table 2）がTime 1およびTime 2ともに、ある程度高い信頼性を示したことから、当初想定していた因子を採用した。

1) 自己意識

菅原（1984）の自意識尺度を用いた。公的自意識因子（10項目）と私的自意識因子（10項目）からなる。回答は、各項目内容に対して、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で評定させた。分析には、項目の合計得点を項目数で除した平均得点を用いた。この得点が高いほど、公的自意識および私的自意識が高いことを意味する。

2) 楽観性

中村（2000）の楽観主義尺度（7項目）を用いた。回答は、各項目内容に対して、「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法で評定させた。分析には、項目の合計得点を項目数で除した平均得点を用いた。この得点が高いほど、楽観性が高いことを意味する。

結 果 と 考 察

Table 2 に、本研究で用いた尺度間の相関係数と記述統計量を示した。

Table 2 自尊心, 安心さがし, 再確認傾向, 楽観性, 自意識の記述統計量と相互相関 (研究2)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1. 自尊心 (T1)	.87										
2. 安心さがし (T1)	.02	.81									
3. 再確認願望 (T1)	-.35 **	.45 **	.80								
4. 再確認行動 (T1)	-.46 **	.36 **	.59 **	.65							
5. 自尊心 (T2)	.85 **	.09	-.31 **	-.40 **	.88						
6. 安心さがし (T2)	-.03	.38 **	.20 *	.14	-.01	.82					
7. 再確認願望 (T2)	-.40 **	.22 *	.58 **	.48 **	-.37 **	.37 **	.85				
8. 再確認行動 (T2)	-.41 **	.10	.40 **	.59 **	-.41 **	.28 **	.71 **	.78			
9. 楽観性 (T2)	.61 **	.21 *	-.14	-.21 *	.65 **	.05	-.17 †	-.28 **	.77		
10. 公的自意識 (T2)	-.35 **	.04	.30 **	.32 **	-.40 **	-.05	.34 **	.37 **	-.21 *	.88	
11. 私的自意識 (T2)	-.18 *	-.06	.13	.17 †	-.29 **	-.11	.27 **	.21 *	-.26 **	.44 **	.84
M	3.14	2.01	3.62	2.80	3.13	2.00	3.66	2.91	2.89	5.07	4.91
SD	0.83	0.67	1.28	1.10	0.87	0.70	1.33	1.25	0.79	1.04	1.02
N	125	127	126	128	128	127	127	128	128	124	126

Note. 対角行列の値は α 係数. T1=Time 1, T2=Time 2.

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

尺度の信頼性については、いずれも概ね高い信頼性を示した。また、Time 1 と Time 2 の安心さがし尺度の相関をみると、中程度の正の相関があり、ある程度の再検査信頼性が示されたといえる。

尺度間の関連についてみると、研究1と同様、Time 1 の安心さがしと自尊心、また、Time 2 の安心さがしと自尊心の間の相関は、無相関であった。また、安心さがしと自意識との関連についてみると、ほぼ無相関であった。さらに、Time 1 の安心さがしと Time 2 の楽観性との関連についてみると、弱いものの有意な正の相関が見られた。ただし、Time 2 の安心さがしと楽観性との相関は有意ではなかった。この正の相関は、過度の安心さがしを行う人ほど、楽観的に物事を考えることを示している。これは、当初想定していなかった結果である。ただし、Time 1 の安心さがしと Time 2 の楽観性との関連なので、長期的にさまざまな変数の影響を受けた結果として、正の相関が見られた可能性も考えられる。単相関だけではあまり詳しい考察をすべきではないけれども、この正の相関が安心さがしと楽観性との正確な関連を反映するとすれば、安心さがしは、非現実主義的な楽観主義 (Norem & Illingworth, 1993) につながるのかもしれない。近年では、楽観性を、過去のパフォーマンスにおける認知と将来のパフォーマンスにおける期待の2次元でとらえる立場 (Norem & Illingworth, 1993) がある。安心さがしと楽観性との正の相関について、この立場に基づいて解釈をすれば、安心さがしを行う人は、過去にさまざまな失敗経験からネガティブな認知をしているにもかかわらず、将来なんとなくうまくゆくと考えている、非現実主義的な楽観主義者である可能性がある。この傾向はあまりに顕著になりすぎると対人的な不適応を引き起こすと考えられ、安心さがしが他者からの拒絶を引き起こす過程と何らかの関連を持っているかもしれない。ただし、本研究の結果からは、このような解釈はあくまで推測の域を出ない。今後、詳細な検討が求められる。

次に、安心さがしと再確認傾向との関連についてみると、Time 1, Time 2 ともに、安心さがしと再確認願望との間には中程度の正の相関が、再確認行動と間には弱い正の相関が示された。これらの結果から、安心さがしと再確認傾向は、概念通り互いに類似した傾向を測定

していることが示唆され、安心さがし尺度の併存的妥当性が示されたといえる。また、楽観性との関連をみると、Time 2の再確認願望との間に有意傾向ながらも弱い負の相関があり、再確認行動との間には弱い有意な負の相関がみられた。Time 1の再確認行動とTime 2の楽観性との間には弱い負の相関が見られた。これらの結果は、再確認傾向が強いほど、楽観性が低いことを示している。

さらに、自意識尺度との関連を見ると、Time 1およびTime 2の再確認願望・行動とTime 2の公的自意識との間に正の関連が示された。また、Time 1の再確認願望と私的自意識との間に弱い有意な正の相関がある傾向が示され、Time 2の再確認願望・行動と私的自意識との間に弱い正の相関が示された。これらの結果は、再確認傾向が強いほど、公的および私的自意識が強いことを示している。

また、低自尊心者と高自尊心者の安心さがしの違いを検討するために、Time 1の自尊心(高・低)×安心さがし(高・低)が楽観性に及ぼす影響について、2要因の分散分析を行った。独立変数の群分けは、中央値折半によって行った。分析の結果、自尊心の主効果のみが有意であり($F(1, 123) = 25.29, p < .01$)、低自尊心者($M=2.53, SD=0.72$)よりも、高自尊心者($M=3.20, SD=0.72$)の方が、楽観性が高かった。また、Time 2の自尊心と安心さがしを独立変数として、同様の分散分析を行ったところ、自尊心の主効果($F(1, 121) = 26.35, p < .01$)に加え、交互作用が有意傾向を示した($F(1, 123) = 3.57, p < .10$)。下位検定を行ったところ、安心さがしを行わない群において、低自尊心者($M=2.47, SD=0.71$)の方が、高自尊心者($M=3.35, SD=0.78$)よりも楽観性が低かった。また、安心さがしを行う群においても同様に、低自尊心者($M=2.74, SD=0.70$)の方が、高自尊心者($M=3.14, SD=0.54$)よりも、楽観性が低かった。さらに、自尊心低群と高群それぞれにおける、安心さがし高低群の楽観性得点には、有意な差はなかった。これらの結果は、自尊心の高低による楽観性得点の差が、安心さがしを行う群よりも行わない群の方がより顕著であるという交互作用の形を示している。より具体的にいえば、安心さがしを行わない低自尊心者が、楽観性が低いことが示唆された。また、安心さがしを行う群でも、低自尊心者は高自尊心者よりも楽観性が低かった。この結果から考えると、同じ安心さがしをする場合でも、低自尊心者は拒絶されるのに、高自尊心者は拒絶されないという現象には、楽観性の低さが関与している可能性がある。

次に、Time 1の自尊心(高・低)×安心さがし(高・低)が自意識に及ぼす影響について、同様に2要因分散分析を行った。公的自意識を従属変数とする分析の結果、自尊心の主効果のみが有意であり($F(1, 117) = 9.73, p < .01$)、低自尊心者($M=5.35, SD=0.96$)の方が、高自尊心者($M=4.78, SD=1.04$)よりも、公的自意識が高かった。また、私的自意識を従属変数とした分析でも同様に、自尊心の主効果のみが有意傾向を示し($F(1, 119) = 3.09, p < .10$)、低自尊心者($M=5.09, SD=0.94$)の方が、高自尊心者($M=4.77, SD=1.07$)よりも、私的自意識が高かった。さらに、Time 2の自尊心と安心さがしを独立変数にして、同様の分散分析を行ったところ、公的自意識、私的自意識ともに自尊心の主効果のみが有意であり、いずれも低自尊心の方が高自尊心者よりも自意識が高かった。

以上より、安心さがしと自尊心との組み合わせでは、安心さがしをする場合にも、低自尊心者は楽観性が低く、高自尊心者は楽観性が高いことが示された。このことは、同じ安心さがしでも自尊心の低い人が行う場合には、他者からの拒絶を引き起こし、自尊心の高い人が

行う場合には他者から受容される要因として、楽観性が関与している可能性を示唆するものである。また、自意識に関しては、安心さがしと関連していなかった。しかしながら、同様の傾向を測定する再確認傾向は、公的自意識および私的自意識と関連しており、自己の内的な状態や他者から見られる側面に注目する傾向の高さが、再確認傾向に関与していることが示唆された。なぜ、このように安心さがし尺度と再確認傾向尺度で、自意識や楽観性との関連のあり方が異なったのか、今度より詳細な検討が望まれる。

総 合 考 察

本研究の結果、安心さがしと社会的スキルのうち、統制スキルとは弱いものの負の関連が認められた。このことは、安心さがしを行う人ほど、コミュニケーション全般において自分の感情をコントロールすることができないと認知していることを示唆する。安心さがしが他者からの拒絶を引き起こす要因として、統制スキルの低さが何らかの寄与をしているのかもしれない。ただし、安心さがし尺度と同様の傾向を測定した、再確認傾向は、統制スキルだけでなく、記号化スキルとの間にも負の関連を示した。この結果は、重要他者に対する再確認傾向が高いほど、自分の意図や感情を相手に正確に伝えることができないと認知していることを示唆するものである。正確に伝えることができないと自分でわかっているにもかかわらず、恋人や友人に安心さがしをしてしまうという皮肉な過程が存在する可能性がある。安心さがし尺度と再確認傾向尺度との間で、このような結果の違いが見られたのはなぜか。さまざまな要因が考えられるが、ひとつには安心さがし尺度が5件法であるのに対して、再確認傾向尺度が7件法と、後者が前者よりも参加者の細かな反応を測定できているためであるかもしれない。

また、研究2では、安心さがしと楽観性および自意識尺度との関連を検討した。その結果、安心さがしをする群において、低自尊心者は楽観性が低く、高自尊心者は楽観性が高いことが示された。このことは、自尊心の低い人が安心さがしをすると、他者からの拒絶を引き起こし、自尊心の高い人が安心さがしをしても他者から拒絶されない要因として、楽観性が寄与している可能性を示唆するものである。より具体的には、例えば、低自尊心者は悲観主義に基づいて安心さがしを行うため、安心さがしの内容が言語的にも、非言語的にもネガティブなものになるために、他者から疎んじられ、嫌われるのかもしれない。これに対して、高自尊心者は楽観主義に基づいて安心さがしを行うため、内容がネガティブなものになりすぎず、他者から拒絶されないのかもしれない。今後、このような可能性について、より詳細な検討が望まれる。

本研究のもうひとつの目的は、安心さがし尺度と、関連する再確認傾向尺度との関連を検討し、尺度の妥当性を検討することであった。分析の結果、両者には、弱い、中程度の相関がみられ、併存的妥当性が示されたといえる。社会的スキルや自意識、パーソナリティ特性との単相関をみると、安心さがし尺度よりも、再確認傾向尺度の方がより多くの関連を示した。具体的には、再確認傾向尺度は、統制スキルや記号化スキルと負の関連を、公的および私的自意識と正の関連を、楽観性とは負の関連を持っていた。これらの結果は、再確認傾向が何らかの対人的不適応と関連していることを示唆するものである。ただし、再確認傾向

尺度の問題点は、因子的な不安定性である。探索的因子分析を行うと、研究1のTime1の変数のみが想定した因子構造を示したが、それ以外の場合には、想定したような因子構造は得られなかった。確認的因子分析を行っても、十分な適合性は得られなかった。この結果は、再確認願望と行動という2つの側面が、人々にとって、それほど明確に別のものとして認知されていないことを示唆する。今後、尺度項目の精選を行うか、あるいは願望と行動を区別せず、1因子として用いるかなど、さらなる検討が必要である。

このような再確認傾向尺度に関する結果に対して、安心さがし尺度は、上述のように統制スキルと負の相関、楽観性とは正の相関があり、自意識尺度とは相関が見られなかった。ただし、自尊心との組み合わせをみると、安心さがしをしない低自尊心者が、記号化スキルや解読スキルが特に低かった。これらの結果は、安心さがし尺度が単相関レベルでは、社会的スキルやパーソナリティ特性とそれほど強い関連をもっていないけれども、自尊心との交互作用の形で関連を持つことを示している。以上のことから、再確認傾向尺度は、抑うつ傾向が他者からの拒絶に及ぼす下方螺旋過程の仲介機能を検討するのに向いているのに対して、安心さがし尺度は、自尊心が他者からの拒絶に及ぼす下方螺旋過程の調整機能を検討するのに向いていると考えられる。問題で述べたように、Coyne (1976) の抑うつの対人理論における安心さがしは、仲介機能を持つものとして想定されたものであり、これを測定するためには、再確認傾向尺度が適切かもしれない。それに対して、Joiner らの実証研究 (Joiner & Metalsky, 1995; Katz, Beach, & Joiner, 1998) では、調整変数としての安心さがしの機能が示されてきており、これについて検証する際には我々が作成した安心さがし尺度を用いる方が適切であると考えられる。ただし、繰り返しになるが、このような安心さがしの調整機能に注目することは、大きなリサーチエクステンションを残すことになる。すなわち、低自尊心者の安心さがしは他者から嫌われるのに、高自尊心者のそれはなぜ受け入れられるのかという問題である。この問題について、本研究の結果からは、低自尊心者が安心さがしを行う際の楽観性の低さが、拒絶を引き起こすことが示唆された。今後、安心さがしの詳細な内容について、言語面および非言語面 (Knobloch, Knobloch-Fedders, & Durbin, 2011) など、さまざまな側面から検討を重ねる必要がある。

引用文献

- Baron, R. M., & Kenny, D. A. (1986). The moderator-mediator variable distinction in social psychological research: Conceptual, strategic and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1173-1182.
- Benazon, N. R. (2000). Predicting negative spousal attitudes toward depressed persons: A test of Coyne's interpersonal model. *Journal of Abnormal Psychology*, **109**, 550-554
- Coyne, J. C. (1976). Toward an interactional description of depression. *Psychiatry*, **39**, 28-40.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- 長谷川孝治・浦 光博 (2002). 低自尊心者における下方螺旋過程についての検討 —他者からの評価と抑うつ傾向に対する安心さがし行動と自尊心の交互作用効果— 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 178-179.

- 長谷川孝治・浦 光博 (2003). 低自尊心者における下方螺旋過程についての検討(2) —安心さがし行動が自他の一体性に及ぼす影響過程— 日本グループ・ダイナミクス学会第50回記念大会発表論文集, 92-93.
- 長谷川孝治 (2008). 自尊心と安心さがしが他者からの拒絶認知に及ぼす影響 人文科学論集〈人間情報学科編〉, **42**, 53-65.
- 長谷川孝治・前田和寛・浦 光博 (2009). 低自尊心者の下方螺旋過程に対する友人関係の進展段階の調整効果 人文科学論集〈人間情報学科編〉, **43**, 53-63.
- 堀毛和也 (1994). 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, **34**, 116-128.
- Joiner, T. E., Jr., & Metalsky, G. I. (1995). A prospective test of an integrative interpersonal theory of depression: A naturalistic study of college roommates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 778-788.
- Joiner, T. E., Jr., Alfano, M. S., & Metalsky, G. I. (1992). When depression breeds contempt: Reassurance-seeking, self-esteem, and rejection of depressed college students by their roommates. *Journal of Abnormal Psychology*, **101**, 165-173.
- 勝谷紀子 (2004). 改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度の信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, **13**, 11-20.
- 中村陽吉 (編著) (2000). 対面場面における心理的個人差：測定の対象についての分類を中心にして プレーン出版
- Katz, J., Beach, S. R. H., & Joiner, T. E., Jr. (1998). When does partner devaluation predict emotional distress? Prospective moderating effects of reassurance-seeking and self-esteem. *Personal Relationships*, **5**, 409-421.
- Knobloch, L. K., Knobloch-Fedders, L. M., & Durbin, C. E. (2011). Depressive symptoms and relational uncertainty as predictors of reassurance-seeking and negative feedback-seeking in conversation. *Communication Monographs*, **78**, 437-462.
- Norem, J.K. & Illingworth, K.S.S. (1993). Strategy-dependant effects of reflecting on self and tasks: Some implications of optimism and defensive pessimism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 822-835.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Scheier, M. F. & Carver, C. S. (1985). Optimism, coping, and health: Assessment and implications of generalized expectancies. *Health Psychology*, **4**, 219-247.
- 菅原健介 (1984). 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

(2013年10月31日受理, 12月6日掲載)

